

【研究ノート】

差別偏見と人文社会科学の視点 —価値多元化社会における「雑草」考—

Discrimination/Prejudice from the Viewpoint
of Humanities and Social Sciences:
Meanings of *Zasso* or Weeds in a Multicultural Society

真屋 尚生
MAYA Yoshio

目次

- 人間天皇と植物学者の「雑草」愛
 - 日本雑草綺譚
 - 雑草・民草・雑兵
 - 「ハキダメギク」独りよがり
 - 「ハキダメギク」突然変異種
 - 雑草余滴
 - 不完全版「雑づくし」
 - 「雑」賛歌
 - 付論：言葉と誠意
- 付注：出師表
〈主要参考文献〉

要旨

私たちの周囲には「雑」があふれかえっている。住まい、家具、電化製品、自動車、コンピュータ、衣類、食品、医薬品、その他、自ら作っておいて、その処理に困る「多種多様な、すなわち雑多な化学物質・化合物」を含まないものは何一つない、といってけっして過言でない。だからといって、身近にある化学物質・化合物の名前や特性などをすべて覚えなければならないとすれば、肝心の暮らしが成り立たない。これらを「雑」として扱うことによって、生活上の利便性が格段に増すことがけっして珍しくない。現代日本人は、「雑」として扱われることすらない多種多様大量のモノに囲まれて生活している。

世界的な潮流として社会的包摂（social inclusion）が重視され、包摂社会（the inclusive society）の構築が求められている今、私たちは、身近に存在する「差別」や「偏見」にも通じる「雑」に対する問題意識をよりいっそう研ぎ澄ます必要があるのではなかろうか。

本稿では、松村哲夫君による昭和天皇と牧野富太郎博士の「雑草」観に関する論考に知的刺激を受け、日本社会における「雑」の社会経済的な意義の今昔をめぐる問題提起＝再評価を人文社会科学の視点から試みた。

1. 人間天皇と植物学者の「雑草」愛

『上毛新聞』（令和5年8月8日）「ひろば」に掲載された松村哲夫稿「『雑草』という呼び名は非礼」は、読み方次第で、筆者が意図したであろう論旨とは別次元の、差別と偏見につながる人文社会科学的な問題提起を内包している。まず、以下にその全文を紹介する。

「庭の草刈りをした。すっきりときれいになり、風が通り、夏の暑さから解放された気分になった。刈り終わると、ふと、昭和天皇の植物への叡慮（えいりょ）を思い出し少し心が痛んだ。陛下は「雑草という草はない。どんな植物でも、みな名前があって、それぞれ自分の好きな場所で生を営んでいる。人間の一方的な考え方でこれを雑草としてきめつけてしまうのはいけない」とおっしゃった。これまで、刈り取った草の名前を意に介したことはない。「人間にとって不要という観点だけで雑草と分類するのはおこがましい」と植物学者・牧野富太郎博士（画像1参照：2023年11月22日に真屋撮影）も主張されていた。



画像1 東京都練馬区・牧野記念庭園にある
牧野博士の書斎と書庫の一部

新たに始めるのはいつでもすばらしいこと。個々の草の名前を覚え、思いやりを持ちたいと思った。美しく、優しい雑草の呼び方はないだろうか。そんな折、しとやかに笑顔が魅力的だった女優の八千草薫さんを思い出した。「八千草（やちぐさ）」ってどんな意味だ

ろう。辞書を引いたら「たくさんの草の意」とあった。雑多な名もなき草も、「八千草」と呼べば愛らしく優雅で、響きもよく聞こえる。「庭の八千草」と呼ぶのもいいような気がした。

いたる所にはびこり、可憐な花を咲かせ、たくましく生長し、人間の都合で持ち上げられたり、疎まれたりする草々。それを、「雑草」と言ってきた人間の身勝手さ、傲慢さを反省したい。」

さらに国語・国文学を専門にする、筆者の旧友でもある松村君は、筆者のために以下の「追補」を私信として書き送ってくれた。松村君の了解を得て、その要旨を以下に掲げる。

- (1) 雑草は一年中、どこでも見かけるので、「季語」になっていないと思いましたが、季語になりうるようです。「雑草茂る」「除草」「草取（くさとり）」「草むしり」は夏の季語。「雑草枯る」は冬の季語。
- (2) 「夏草や兵どもが夢の跡」の、夏草は、雑草の真骨頂だと思います。夏草が生い茂る平泉の高館（たかだち）に立ち、北上川を見下ろし、夏草に小便した記憶がありません。最近こういう光景を目にします。

空き家には刈る人もなき雑草かな（松村）

- (3) 八千草は、辞書では「多くの草」の意味だが、俳句の季語としては、「秋の頃のもろもろの名もなき草」のことで、秋の季語「秋草」の傍題になっている。

八千草と言えば愛らし雑の草（遊雀）

- (4) ハキダメギク、漢字で書くと、「掃き溜め菊」（画像2 参照（出所は川崎市総合教育センター「川崎の花」「ハキダメギク」）：川崎市高津区で2000年6月15日に撮影）。こんなにかわいい花なのに、いわゆる雑草と言われている花で、とんでもなく酷い名前を付けられたものだ。ハキダメギクと言う名前は、牧野富太郎博士が世田谷のゴミ捨て場（掃き溜め場）で発見したので、付けた名前だそうです。牧野先生、何もそんなかわいそうな名前を付けなくても。ご愛用の印鑑は、ウイットとユーモアに溢れて



画像2 ハキダメギク



画像3 牧野博士が愛用した印鑑と印影

いるではありませんか（画像3参照：牧野記念庭園常設展示室で2023年11月22日に真屋撮影）。

牧野富太郎は、キンモクセイ、ケヤキ、ヘラノキなど、日本の四季を彩る身近な草木1,500種あまりの新種・新品種を発見、命名。イヌノフグリの命名者も牧野富太郎。

カタツムリ蚊取り線香巻き「の」かな（松村）

2. 日本雑草綺譚

筆者・真屋と同世代の松村君の上掲の彼の論稿には、彼のすなおな感性が横溢していて、楽しい知的刺激を得られた。以下では、そこで取り上げられた3人の人物に絡めて、彼の感性・視点とは異なる人文社会科学的な視点からの「雑」にからむ反常識的な若干の異端の問題提起を試みる。

まず、「雑草という草はない」と雑草愛にあふれたお言葉を発された昭和天皇については、筆者には入手可能な信頼しうる情報は非常に限られていることから、もっぱらその「雑草観」を手掛かりにして若干の「人間」天皇批判を試みたい。

次いで、牧野富太郎博士については、植物学者であること以外ほとんど知ることはなく、朝の連続テレビ小説も日曜日夜の大河ドラマも視る習慣はない。それでも、2023年度前半に放映されたNHK連続テレビ小説の主人公のモデルが博士であることくらいは知っている。その博士が名付け親（godfather）の「ハキダメギク」は汲めども尽きぬ思考の素材を提供してくれる。

八千草薫さんについては、映画やテレビ・ドラマで何度か一方通行でお目にかかったこ

とがある程度にすぎないが、「八千」について、こんなことを考えた。多数を表す表現として、「八十（やそ）：西條八十（詩人）」「八百（やお）：八百屋」「八千（やち）：千代に八千代に（「君が代」：『古今和歌集』『賀歌』の一節）」「八百万（やおよろず）の神：『古事記』『上つ巻 天照大神と須佐之男命 天の岩屋戸』の一節」などがあることは知っていたが、「八千草」が「多くの草」を意味するとは考えたこともなかった。八千草さんの芸名の由来は知らないが、多くの草の中であって芳香を漂わせる女優を目指す、あるいは多くの人びとに薫風を送る存在になる、といったあたりだろうか。

(1) 雑草・民草・雑兵

昭和天皇は、雑草という名の草はない、とおっしゃったそうだが、ご自分は「裕仁」というお名前しかお持ちにならない。われわれ民草（たみくさ、あおひとぐさ）は、1875年の平民苗字必称義務令により、みな公的に名字を持つことになったが、天皇はわれわれと違い、今にいたるも「姓」をお持ちにならない。というのも、天皇は、日本人としては、まことに珍しく、万世一系唯一無二の元・現人神／上御一人で、人にして人に非ざる最上級・別格の貴種であらせられ、下々はこのお方から「姓」を賜った。かかるお方に「姓」を与えるものはこの世に存在しない、とされた。だが、その文化人類学的な源流？は半島にもつながっていて、いってみれば、天皇は貴種中の貴種であらせられても混血種の日本人、というのが歴史的には正しいようだ。

姓名も持たない雑草は、お上と同じ、否、それ以上の特別種で、それぞれが一国の現草神（あらくさがみ）？踏まれても、刈られても、引き抜かれても、焼かれても、水に流されても、ついには（一時的に）枯れても、土と水と空気と太陽があれば、何度でも芽を出し、あたかも海の満ちることがないように、雑草は絶えることがない。その生命力たるや人間の比ではなく、ほとんど神がかっている（画像4参照：東京都千代田区で2023年11月27日に真屋撮影）。もっとも、海は、異常気象・地球温暖化で、遠からず陸地をのみこみ、地球を覆いつくしてしまうかもしれない。たとえそうであっても、雑草の多くは、おそらく水生植物に姿を変えて、水面に顔を出しているであろうし、川や湖沼には水藻が繁茂し、海中では「雑」海藻や「雑」海草が揺らめいていることであろう。そのとき筆者は、誰一人帰還したものなき、どこか遠くに間違いなく旅立っている。

遠い先の話はともかく、上御一人に対し、われら民草には、貧しくとも雑草の生命力がある。次元は異なれど、お上も民草も日本人として種を残すことが最大の使命とすれば、生物分類学者でもあった？とされる、神話によると万世一系の昭和天皇が雑草に寄せられた思いがよくわかる。だが、名があっても、このお方には知られることがなかった「無名」の人びとに対する真の「叡慮」を、このお方はお持ちだったのだろうか。お持ちだったならば、あの戦争で、あんなにも多くの人びとが命を落とすことはなかったはずだ。少なくとも、沖縄、広島、長崎で多くの人びとが命を失う前に、戦争を終結に導くことができたはずだ。人間には冷淡だったが、植物には優しく上御一人は、それかあらぬか戦争責任をおとりになることもなかった。無責任は日本文化の精華というわけでもなからうが、

「雑草」という名の草がないのであれば、「民草」という名の人間もいないはずなのだが、



画像4 歩道と車道の段差の僅かな隙間に生きる雑草

叡慮がそこに及ぶことはなかったようだ。そもそも人間をとらえて、比喩的とはいえ、「草」はないだろう。畏れ多いご叡慮が、いかほどのものであったか、よくわかるではないか。

かつて多くの日本人男子が子どものころ、まともな用具などなしに、1個のボールと1本のバット（ときに棒切れや青竹で代用）と数個の（しばしば布製の）グローブで楽しんだ草野球は、雑草が生え放題で、石ころがごろごろ転がっている空き地でやることから「草」野球といわれるようになった、と考えていたが、どうやらそうではなく、民草が楽しむ、まがい物の野球だったことに由来するのかもしれない。もっとも野球という言葉自体に「野」が含まれているのだから、わざわざ屋上屋を重ねるかたちで、草野球などという言葉を作る必要はなかったともいえるのだが。ちなみに『広辞苑 第七版』によると、「野」は「自然の広い平地」とあり、この広い平地には「雑草」すなわち「草」が生えていたはずなので、Baseballが日本に伝来した当時の「野球」は、すべからく「草」野球だったはずであり、整備された阪神甲子園球場や東京ドームなどで行われる当世風の野球ではなく、「草」野球こそ Baseball ならぬ日本野球の王道なのではなかろうか。それが今や子どもたちでさえ、高価な用具を持ち、整備された ballpark で野球に励み、国際試合をしたり、海外遠征をしたりするまでになった。

昨年（2023年）も広島と長崎で原爆忌が催された。戦争・戦場で、今も昔も一番つらい思いをしたのは民草＝雑草からなる「無名戦士」すなわち「雑兵」。雑兵の兵種の圧倒的多数が歩兵。生産力においてAと比較しただけでも天地の差があるうえに、赤紙（臨時招集令状）1枚で、尽忠報国の大義名分のもとに有無をいわずかき集めた無辜の民からなる歩兵を使い捨てにした帝国陸軍が、ABCD（米・英・中・蘭）4か国を敵に回して勝てるはずもなかった前世紀の大戦。極東に位置する資源に乏しい小さな島国が、いかに軍備拡大に血道を上げようと、武力に対するに武力をもってして国を守ることはできない。この簡単な道理を理解できない／しようとしぬ頑迷固陋の「愛国者」が、この国には多すぎる。「海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なぬ 顧みは せじ」（大伴家持）（佐々木、1973、p.244）—こんな歌が厳かに歌われる世の中の再来は絶対に避けなければならない。

清水崑の漫画「戦国雑兵」を原作とする池広一夫監督の映画「雑兵物語」（1963年）は、

映画史に残る名作傑作とはいえないが、まだ映画産業に活力があった時代の作品で、雑兵の悲しさ、たくましさ、したたかさを、一味違った悲喜劇として描いている。

将棋の世界では史上初・前人未踏の8冠（竜王・名人・王位・王座・棋王・王将・棋聖・叡王）を弱冠？21歳で達成した藤井聡太さんの話題で持ち切りだ。彼の活躍は、将棋界の枠を超え、今や社会現象的な規模での世の関心を集めている、とさえいえよう。筆者・真屋は、将棋の駒の動かし方を知っている程度だが、数が多く、「へぼ」には一番弱そうに役立たずに見える駒の「歩（兵）」が実は曲者なのである。将棋の格言にいわく、「歩のない将棋は負け将棋」「手のないときは端歩を突け」「端玉には端歩」「三步持ったら端に手あり」。

雑兵侮るべからず。

(2) 「ハキダメギク」独りよがり

「白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ」（伊藤，2021，p.9）と詠んだ若山牧水に倣い、「掃き溜め菊は哀しからずや塵の汚れ芥の匂いにも染まず芽吹く」と詠んだりしたら、牧野先生からお叱りを受け、世の歌人からは顰蹙を買うことになるかもしれないが、古来、「掃き溜めに鶴」という。「ハキダメギク」は、松村君が嘆くように「とんでもなく酷い名前」でも「かわいそうな名前」でもない。その生命力の強さからしても、むしろ名もなき雑草に対する賛美・美称と解すべきではなからうか。「ハキダメギク」は掃き溜めにあつたればこそ、牧野先生の注意を引き、掃き溜めにあつてこそ、一段とその可憐さ／美しさ／健気さ／強さが輝きを増す。これが、ハキダメギクの真骨頂ではなからうか。ハキダメギクが桜や牡丹や薔薇や蘭と並んで咲いていたのでは、大方の人たちは見向きもしないであろう。

ちなみに国立研究開発法人国立環境研究所「侵入生物データベース」「ハキダメギク」によると、ハキダメギクは、1-2年草で、1920年ごろに海外から日本に侵入し、今ではほぼ全国に分布している。生息環境は、畑地・樹園地・庭・荒地・路傍・河岸で、生態的特性として、湿った肥沃地を好むが、乾燥した場所にも繁茂する、ということだから、1世紀に満たない間に日本全国に根付いたのもうなずける、驚異的な生命力を有している、といえよう（画像2参照）。

そもそもどんな時代であろうと、どんな場所であろうと、「掃き溜め」がなくては生活の場全体に塵や芥が散乱し、暮らしにくいことこの上なからう。歴史を遡ると、先史時代の人びとが、貝殻や他のさまざまな生活廃棄物を、ある限られた場所に投棄し続けた跡、と推測される場所が貝塚（shell midden, shell mound）として今日に残っている。長い社会の歴史の中で、ゴミの種類・量、その処理方法などが大きな変化を遂げてきているが、今日では、多くの国々や地域において、生活廃棄物・産業廃棄物・核燃料廃棄物などからなるごみ処理は、地球環境の保全にも関わる21世紀最大の課題の一つになっている。もっとも時代は少しさかのぼるが、インド的には次のような考え方もあるようだ（田村，2008，pp.67-68）。「物ニ、キタナキ物ト清キ物トノ類アルベカラズ。スベテハ大地ノ肥料トナラン。」だが、詩人・田村隆一は、その未来に関しては悲観的である。「ビニール製品

と自然物との類は、大地に関するかぎり、厳然として存在する。(中略) やがてインドの大地も、ビニールの化けものに襲われる日がくるに違いない。かつての日本のように、それもごく近い日に…」筆者・真屋は、インドを2度訪問し、合わせて半月程度滞在しただけだが、この田村さんの直感は正しかったようだし、人間はたくましい(画像5・6 参照：インドで2007年1月に真屋撮影)。



画像5 New Delhi のハキダメで何かをあさる人と犬



画像6 New Delhi のハキダメと背中合わせの路上で暮らす人びと：なぜか女性と子供だけ

ちなみに、東京23区では、次の過程を経て、ごみが埋め立て処分されている(東京都環境局「ごみが埋立処分されるまでの流れ」)。

(1) 収集・運搬：ごみの収集と中間処理施設(清掃工場, 不燃ごみ処理センター, 粗大

ごみ破碎処理施設) への運搬。

(2) 中間処理 (焼却・破碎等) : ごみの埋め立て量を少なくし、最終処分場の使用可能年数を延ばすために、埋め立て前に、ごみを中間処理施設で焼却・破碎。

(3) 埋め立て・覆土 : 中間処理施設で焼却・破碎されたごみを埋め立て処分場に運び、種類別に定められて区画に埋め立て。

生物学にも文学にもあまり関係がなさそうな職業野球全盛の 20 世紀後半の話です。第 2 次世界大戦後初の打撃 3 冠王に輝いた野村克也は、現役選手時代に、実力はあっても人気のない自らを月見草に見立て、実力的には大差なくても、人気に関しては天地の差があった王貞治・長嶋茂雄を向日葵に見立てて、その格差を嘆いたそうだ。ハキダメギクと胡蝶蘭の差は、月見草と向日葵の差とは段違いといったところか。

科学の世界には新発見をめぐる命名権に関する特殊な慣習があるにしても、牧野先生は、多くの物いわぬ樹木や草花の気持ち? も考えず、勝手に名前を付けられたことになる。松村君の感性・発想を裏返して評すると、大先生の感性・発想は皮相的に過ぎ、「雑草」に勝手に名前を付けるなど「おこがましい」のではなかろうか。おそらく、牧野先生によって命名された樹木や草花の大方は、先生よりもはるか前から、地球上のそこかしこに存在し、それぞれの生を営んでいたはずである。彼岸にいらっしゃる牧野先生には届かぬ、樹木草花に代わっての不遜な抗議になるが、何種類もの樹木草花に勝手に名前を付けた牧野先生にこそ、その「独りよがり」「傲慢不遜」を反省していただかなければならないのではなかろうか。

そうした人物を無批判に NHK が看板番組枠で半年にわたって取り上げる。松村君にいわせると、有名人や権威がある (とされている) 人物の意見や行動を批判的に考えることなく受け入れてしまう、ある種の英雄崇拜傾向は危うい。内村鑑三は、代表的日本人の一人として中江藤樹を取り上げ、次のように述べている (内村 (鈴木訳), 1992, p.121)。「評判は彼 (中江藤樹…真屋加筆) は何物よりも嫌った。」現代では、スポーツ・文化施設などの名称に企業名を付けることがビジネスとして確立している。名前を付ける権利 = 命名権 (naming rights) は、金を払って買わなければならないのである。命名権については、サンデル (Michael J. Sandel) が『それをお金で買いますか 市場主義の限界 (What Money Can't Buy: The Moral Limits of Market)』で、非常に興味深いアメリカの事例をいくつか紹介し、批判的な議論を展開している。

滝野瓢水の句「手に取るなやはり野に置け蓮華草」を強引に換骨奪胎して一句：

掃き溜めでひととき映える菊の花 (真屋)

松村君の上掲の句に答えて、少し豪儀に駄句をもう一つ：

エスカルゴ栄螺のあてで泡の酒 (真屋)

(3) 「ハキダメギク」突然変異種

先般来またぞろ日本大学がメディアを賑わしている。その救世主と期待され、2022 年に同大学理事長として降臨されたのが、大学経営に関する見識も能力も経験もないが、自己顕示欲が強そうな、直木賞ほか多数の賞を受賞している当代の人気作家・林真理子さん。

ご本人はやる気満々で、「自分は天才である」(谷崎, 1975, p.181)がゆえに、大学改革などルンルン、とお考えになっていらっしやったのかもしれない。ところが、彼女の「理事長就任挨拶」(『日本大学学報』第1078号, 2022年)に目を通すと、心ある人は、この程度の見識の理事長では危急存亡の秋にあるともいえる、日本最大級の規模を誇る大学の抜本改革など夢のまた夢、と気付いたはずだ。彼女は、ヘーゲル(G. W. F. Hegel)のいう「俗悪な感性」と「優秀な知性」(Hegel(長谷川訳), 1994, p.332)のうち前者のみ身につけていらっしやるようにも見える。文筆家としては林さんの大先輩ともいべき井原西鶴は次のように書き残しています。「分際より万事を花麗にするを近年の人心、よろしからず(その人の分際以上に万事を華美にするのが近年の人心であるが、これはよくないことだ)」(井原(堀切), 2009, pp.27, 194)。大学人としての林さんの資質の評価については、さらに後掲「主要参考文献」中の拙稿(2013)「禅画と人文社会科学の視点」を参照していただきたい。

理事長就任後1年が経過したところに、出なくてもよい記者会見(2023年8月8日)に顔を出し、海千山千のメディアを相手に、言葉の専門家として丁々発止のやり取りをなされるかと思いきや、「スポーツ科学部」を新設してまで「スポーツ日大」を売り物にしようとしていた／いる日本大学の理事長でありながら、「スポーツは私にとってちょっと遠慮すべき分野だった」などと、昨今の日本大学問題の核心に関わる頓珍漢な発言をし、大学人としての見識の欠片すら示せず、終始仏頂面で急性失語症に陥ったかのごとき対応で、すっかり化けの皮がはがれてしまった。思うに彼女は、A. スミス(Adam Smith)いところの「苦痛ほどはやく忘れられるものはない」(Smith(水田訳), 1981, p.39)ことを体得されていらっしやるのかもしれない。

お飾りとしての林さんの大学人／文化人としての格付けは、2023年10月1日に彼女が自身のYouTubeチャンネルに投稿した「今日は全身プラダで」に象徴される、その派手さ／厚顔ぶりにおいて、馬子にも衣裳とはいうものの、牧野博士が命名された雑草「ハキダメギク」の突然変異種「厚物咲」、同じキク科で、その名も豪勢で多くの人びとに好まれる「マリーゴールド(和名:孔雀草・万寿菊・千寿菊)」といったところか。だが、女史の母校でもある日本大学は、玉石混交・課題山積とはいえ、けっして掃き溜めではなく、優に1世紀を越える歴史を誇る、日本有数の歴とした教育研究機関であり、似非文化人の彼女の手にも負えるような軟な組織ではない。その理事長職を、問題の所在／担うべき責任の重さ／自らの能力の限界を深く考えることもなく、「何と／マリコが理事長に／まさかの電撃就任／世間騒然／本人奮戦」(林, 2023, 「帯」)などと、お気楽に引き受けられた。ところが「本人奮戦」すれど…7万8118人の学生諸君(学部・大学院)はじめ、6956人の教職員、124万9403人の校友(卒業生)(日本大学広報部, 2023, pp.20, 21, 38)ほかの多くの関係者が困惑迷惑する事態の発生と処理の不手際。「ハキダメギク」突然変異種には、ご降臨1年余の時点では、純系? 「ハキダメギク」ほどの可憐さも環境適応力も見出せない。イソップ(Ésope)は、はるか昔に次のような警告を発しています(イソップ(山本訳), 1978, p.83)。「欲張りのためにもっと多くのものを欲する者は現在あるものさえもなくする。」

フェミニストからは厳しい批判を浴びたJ.ラスキン (John Ruskin) ではあるが、「すべての劇の悲劇的結末は、いつも男の愚鈍とか過失とかによって惹起され、若しその救ひがあれば、それは婦人の智と徳によるので、それ以外には救ひはない」(Ruskin (石田ほか訳), 2015, p.133) と語っていることからすると、林さんは例外中の例外で、稀有の婦人に今のところなる可能性がきわめて大きい。また、ラスキンとほぼ同時代に生きたJ. S. ミル (John Stuart Mill) がいうように、「女性のあやまった行動は経験と一般知識との不足からくるのであって、知識を利用する能力がないからではない」(Mill (大内兵衛ほか訳), 1984, p.23) とすると、大学人としての経験も知識もない林さんの現状は当然の帰結といえよう。

無言の行の石のお地藏さんと化した林さんに鷗外先生の言葉を贈ります。「八方塞がりになったら、突貫して行くつもりで、なぜ遣らない」(森, 2023, p.152)。また、おそらく彼女とは異次元の多くの修羅場をくぐっているであろう直木賞作家の浅田次郎さんは、次のように説いています。「埋もれてしまう才能とか、報われぬ努力とか、武運つたなき敗戦とかいう現象は人生にままする」(浅田, 1999, p.242)。さらに、戦う人だったナポレオン (Napoléon) の言葉を贈ります。「ひとたび戦うと決めたら、勝つか滅びるかしなければならぬ」(Aubry (大塚訳), 1996, p.248)。どうです。妙案は湧き出てこなくても、少しは元気が出ませんか。

昨今の日本大学の混乱は、彼女を理事長に担いだ、立派な肩書の「理事長選考委員」諸氏一室伏きみ子 お茶の水女子大学名誉教授・前学長、田中愛治 早稲田大学総長、長岡孝三 三菱UFJ証券ホールディングス株式会社特別顧問、矢口悦子 東洋大学学長、加藤直人 日本大学理事長・学長、木村政司 日本大学常務理事・日本大学芸術学部長 (加藤・木村両氏は田中英壽 (前) 理事長体制下で大学運営の中枢にいた：役職等は選考時 (2022年6月) のもの) —の眼鏡違い／眼力の貧困によるところ大でもあり、その責任が問われなければならない。また、記者会見で、理事長よりも大学人としてのはるかに長い経歴を持っているはずの酒井健夫学長—田中英壽 (前) 理事長体制下での最初の総長：2024年3月31日に学長辞任—が、林真理子理事長を少しも支えることができていなかった／支える気がなさそうにさえ見えたのも情けなく、みっともなかったが、傘寿をすぎたお方にお飾り理事長のお守りは荷が重かった、といったところか。林理事長と酒井学長の特大規模ともいえる教育研究組織の管理者としての無能かつ無責任ぶりについては、日本大学アメリカンフットボール部薬物事件対応に係る第三者委員会「報告書」(2023年10月30日) が、「危機管理の在り方の認識が全くない」と厳しく指弾している (前掲「報告書」p.85)。

これでは、林さんにとっては遺憾であっても、世間が「お飾り理事長」と囃し立てるのも仕方なからう。学生・就職、競技スポーツ担当副学長 (2023年12月31日に副学長辞任) にいたっては論外。ウエーバー (Max Weber) いわく、「政治行為の最終結果が、往々にして、いや決まって、当初の意図とひどく喰い違い、しばしば正反対なものになる、というのはまったく真実で (中略) 一切の歴史の根本的事実である」(ヴェーバー (脇訳), 2022, pp.93-94)。その言動からすると、林さんも酒井さんも、ウエーバーなんて読んだことはないだろうし、ひょっとすると、その名前さえご存じないかもしれない。日本大学

(付属高校等を含む)の図書館には、合計 5,629,301 冊の蔵書 (2023 年 4 月現在: 日本大学広報部, 2023, p.22) があるはずなのだが、宝の持ち腐れといったところか。実力を養成し、知識を豊富にするには、「時に触れ、折を求めて実地の研究を進めると共に、良書を熟読する必要がある」(牧野, 2022, p.297) とは、牧野富太郎博士の言葉。

それにしても、ことが明るみに出たのが 2023 年の夏季休暇中のこととはいえ、日本大学の学生・教職員ほか内部からの改革の声が一向に聞こえてこないのは、なぜだろう。それでも、大学運営の責任を負うべき人たちの混乱ぶりを他所に、学生諸君が少なくとも表面上は平静を保ち、授業やサークル活動などに勤しんでいるのであれば、それはそれで素晴らしいが、神ならぬ雑草は適応力抜群で強靱な生命力を持ってはいても、万能の力を持っているわけではなく、日本大学関係者一筆者・真屋も最広義におけるその一人一が、いまだに林さんに大学改革の旗振り役を期待しているとすれば、大学人としての見識が問われる。日本大学関係者の中には、知情意すべてにおいて林さんをはるかにしのぐ人材が、間違いなく多くいるはずなのだが。

(4) 雑草余滴

「雑草」を植物分類学上お認めにならなかった牧野富太郎先生ではあるが、めでたい春の七草の「ホトケノザ」とユリ科の小さな毒草「ツクバネソウ」を、ともに以下のように雑草扱いされている。やはり「雑」は便利な言葉であると同時に、恐るべき力を秘めた言葉でもある。「いわゆるホトケノザは (中略) そこここに生えている普通の一雑草である」(牧野, 2022, p.147)。「ツクバネソウは (中略) 山中の樹下にポツポツと生えているただの一雑草にすぎない」(牧野, 2023, p.117)。どうやら「雑草」は天皇や博士の思いとは別に、この世になくなくてはならない存在であり、言葉のようだ。

古来、美人を表現する言葉として、「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」一筆者・真屋は、外観・容姿・風貌などで、男女を問わず、人間の美醜を判断するものではないが、歴史的事実として、この言葉は今に残る一というが、これは、生薬としての芍薬 (当帰芍薬散ほか)・牡丹 (大黄牡丹皮湯ほか)・百合 (百合知母湯ほか) の使い方にも通じるらしい。とすると、芍薬・牡丹・百合は、まさに花も実もある「草」の代表といえよう。

ところで、八千草が多くの草を意味することは、すでにみたとおり、雑草を優雅に表現した言葉、とってよかろう。「しとやかで笑顔が魅力的」な女優さんの芸名が「雑草薫」ではぞっとしないが、これを「八千草薫」とすると、何か床しく感じられる。女優の八千草薫さんは、可憐な日本女性一たとえば、東宝映画「宮本武蔵」(1954 年) でのお通一を演じて天下一品とされたが、実像はかなりの猿連? だったとのこと。何しろ雑草なのだから。そうでなければ、宝塚歌劇団で娘役の頂点を極め、銀幕さらにはテレビの世界でも生き残り、親子ほども歳が違う谷口千吉一上記「宮本武蔵」で武蔵を演じた三船敏郎のデビュー作「銀嶺の果て」の監督一を手玉に取って結婚することもなかったであろう。お通一だって、戦国の気風が色濃く残るあの時代に、許嫁 (いいなずけ) の本位田又八を振り捨てて? 武蔵の後を追ったのであるから、単純に純情可憐な乙女というよりも、自立した意

志的な女性の魁，といったところか。もっとも，純情可憐な乙女などという，旧来の男性本位・男性優位 (machismo) の感性・認識として糾弾される可能性が大いにありそうだ。雑草も呼び方が変わると，なかなかどうして捨てたものではない。

いずれにしろ，日本人は，何かにつけて，漢字の「八」が末広がりて好きなようだ。順不同で列挙すると，「八雲」「八重垣」「八重歯」「八重咲 (八重桜・八重菊ほか)」「近江八景」「金沢八景」「入唐八家」「永字八法」「八紘為宇 (八紘一字)」「八艘飛び」「南総里見八犬伝」「船中八策」「八百八町／八百八橋」「八十八夜」などなど。

筆者と同年代の元？サユリスト諸氏には夢を壊して申しわけないが，吉永小百合さんも同様で，演じる役と素顔は別。外面如菩薩内心如夜叉はちといいすぎかもしれないが，若き日には相当な酒豪だった，とも仄聞する小百合さんは，ユリはユリでも鬼百合か？姫百合か？鬼百合の花言葉には，「華麗」と「嫌悪」など，姫百合のそれは「強いから美しい」。いずれにしろ表と裏があり，生涯？清純派に属する女優ではあっても見かけほど単純ではなさそう。そういえば，彼女の配偶者も，一回り以上年長のテレビ局のプロデューサーだったはずだから，八千草さんと何か共通点があるのかもしれない。これはけっして年齢差別ではありません。

かつて (1980年代と2000年代の半ば) 筆者がイギリスに滞在していたとき，年齢差50-60歳以上で，資産家の虚弱な高齢者と，貧しい／少なくとも裕福とはいえないが，心やさしい若者の結婚が，ときどきタブロイド紙 (大衆紙) などで大きく報じられていた。むろん，愛さえあれば，歳の差や貧富の差なんて問題ではない！とは当事者お二人の言い分だが，高齢者の家族親族からは異論続出，ときに訴訟に発展することさえあったように記憶している。

聖母マリア様の純潔の象徴は白百合とされるが，彼女だって，なかなかどうして一筋縄ではいかない Single Mother のはしり。ましてや科学的な解明が今に至るも困難な処女懐胎によって，神の御子を地上に送り出した，無原罪・無謬性の女性として，彼女の右に出る者はいないであろう。『聖書』を読んだだけでは，彼女がどのような女性だったのかよくわからないところも，いかにも神秘的で興味を掻き立てられる。ロンドンの The National Gallery (国立美術館) 所蔵の Leonardo da Vinci の作品 The Burlington House Cartoon (聖アンナと聖母子と幼児聖ヨハネ) は，何時間見ても，何度見ても，他の展示室とは隔絶された小さな薄暗い展示室の雰囲気とも相まって，キリスト者でない筆者を神秘の世界に誘ってくれる。美術鑑賞眼の乏しい筆者にとって，この作品は世に知られた「受胎告知」「最後の晩餐」「モナ・リザ」「洗礼者ヨハネ」などをしのぐ Leonardo の最高傑作。

3. 不完全版「雑づくし」

少し視点を変えて考えてみると，以上のように「雑」は立派な範疇である。思いつくままに「雑」に関する雑然として雑駁な雑考・雑論との非難を浴びるかもしれませんが，さらに人文社会科学の視点からの卑見をご披露させていただきます。以下は，論理的に体系化されていないところが，まさに本章を「不完全版」とした所以でもあります。

なお、清少納言の『枕草子』で縦横に展開される「ものづくし」に代表される「〇〇尽くし」は、動詞「つくす」の連用形「つくし」が名詞「〇〇」に付いて、その類のものをすべて並べ上げるのが本義であるようです、むろん以下では「雑」をすべて並べ上げているわけではなく、したがって以下は自己矛盾もはなはだしい「不完全版」の「尽くし」です。福沢諭吉の『世界国尽』でさえ、その「凡例」の冒頭において、「此書は、(中略)、英吉利、亜米利加にて開版したる地理書、歴史類を取集め、その内より肝要の処だけ通俗に訳したるものにて、私の作意は毫も交へず」(福沢訳、1981、p.106)とあることからすると、本章の大方が、先人の著作を随所に引用しながらも、もっぱら筆者・真屋の「作意」によって著述されていることは、「不完全版」とはいえ、むしろ「可」とされてよいのではなかろうか。

〈暮らしの中の雑多な「雑」〉

世の中、雑務・雑色・雑役・雑用・雑事・雑念・雑談などがなくなると、味気なくなる。いってみれば、こうした文字通り雑多な「雑」には、人間の活動に不可欠かつ有益な「ゆとり／気分転換／息抜き／遊び／趣味／自己啓発／緩衝材／潤滑油／触媒」などの効用も期待できる。とりわけ年金生活世代にとって、これらに関わる費用たる「雑費」が馬鹿にならないが、その多くは必ずしも生活上必須の項目とはいえ、加齢とともに個人差が非常に大きくなる。

先般(2023年9月)、久し振りに東京・丸の内を出光美術館に出かけ、「江戸時代の美術—「軽み」の誕生」を楽しんだ。Key wordは「軽み(lightness)」。この展示会に関する同美術館のホームページ上の「展示概要」には、次の解説が載っていた。「(狩野)探幽は、絵画の心得をめぐって、後水尾天皇(1596—1680)に対して「絵はつまりたるがわるき」という、すぐれて印象的な言葉を残しています。つまり、絵の要素のすべてを画面のなかに描きつくすのは好ましくない、ゆとりや隙を感じさせるようにするべきだ、と。(中略)江戸時代の文芸において、余白や余情といった要素を何よりも尊ぶことは、たとえば発句に「軽み」を求めた松尾芭蕉(1644—1694)の俳諧理論なども強く響き合うように、この時代を広く覆った価値観の一つであったといえるでしょう。」

筆者・真屋の理解では、この「軽み」こそ「雑」に含まれる重要な要素に他ならない。知るかぎりでの泰西画は、どれもつまっており、そこに余白や余剰や余韻を効果的に用いる、という発想や手法を見出すことはできない。季節の移り変わりに応じて、取り外したり、取り換えたりできる木と紙と土の住まいと家具調度で暮らす日本人と、相対的に季節感が乏しく、取り外し／取り換えが簡単にはできない石の住まいに暮らすヨーロッパ人との感性の違いが、こうしたところにも出ているのであろうか。

〈文字・情報にからむ雑多な「雑」〉

雑文、雑論、雑説、雑記、雑詠、雑俳、雑歌、雑誌、雑報、雑録、雑言、などがあって、文化は豊かになり、暮らしも潤い、人びとの感性も磨かれる。世の中、学術論文・学術雑誌や純文学作品・文芸雑誌ばかりでは息が詰まる。しかるがゆえに、林真理子さんのようなお方でさえもてはやされ、その大学人、しかも大学の最高運営—あえて「経営」という言葉は使わない—責任者としての能力や資質や適性などにはかかわりなく、その知名度だ

けで、大学の理事長にかつがれ、ご本人もその気になる。これはこれで面白いのだが、すべてが、それでおさまるわけではなく、林さんを理事長に迎えた大学の学生諸君、教職員諸氏ほか、関係者はたまたまのものではない。

多くの勅撰和歌集の手本となった『古今和歌集』でさえ、「雑」をしっかりと位置付けている。筆者・真屋のお気に入り2首をご紹介します。

巻第十八 雑歌下 題しらず よみ人しらず (佐伯, 1988, p.220) :

世の中は夢かうつゝか うつゝとも夢とも知らず ありてなければ

巻第十九 雑躰 題しらず よみ人しらず (佐伯, 1988, p.249) :

何をしてみのいたずらに老いぬらん 年の思はん事ぞやさしき

本小論は、雑考雑文雑論の類と評され、読むに値しない、と断じられるかもしれないが、雑に囲まれて生きてきた雑中の雑の筆者には、そうした批判に対する免疫力と抵抗力が生きた年数に比例して相当程度備わっていますから、批判大歓迎です。批判のないところに進歩も発展もありません。

〈雑学〉

非体系的・非科学的・非論理的・耳学問的・体験的・断片的な知識の寄せ集めながら、実生活においては役に立つこともあり、人間関係を円滑にする潤滑油にもなるのが雑学。これを身につけている者を、物知り・訳知り・事情通・雑学の大家などという。「学」の質的な水準？が上がると、生き字引・歩く辞書・博学の士・博覧強記の人などとして一目置かれるようになる。

〈雑種〉

確立された形質の異系統間の交雑から産生された個体を雑種といい、一般に生物は、近隣種を除いては交雑できないか、子が生まれても不妊になる場合が多い。家畜や農作物では、混血(交雑)はさまざまな優れた形質を家畜や作物に与えるための品種改良として、実験的交配が繰り返されてきた。

純血系が極端に尊重されるのが、競走馬・競馬の世界であろう。その頂点に立つサラブレッドも、元をたどれば、自然界にサラブレッド種がいたわけではなく、早く走ることに特化すべく人工的な交配によって品種改良された究極の雑種が、純血のサラブレッド種なのである。18世紀末以来、サラブレッドは厳格な血統登録によって管理されるようになり、1頭1頭に必ず血統書がある。しかも両親がサラブレッドでなければ、サラブレッドとは認められない。サラブレッドは、姿も優美だが、基本的に生きたギャンブルの道具としてしか使えず、非常に繊細でひ弱い。競走馬として結果を残すことができず、登録抹消された馬の多くは、殺処分されたり、食用になったりしている(『東京新聞』(夕刊), 2024年1月30日)。対するに、おそらくサラブレッドほどには血統が問われない農耕馬・馱馬・軍馬などの多くは、サラブレッドの対極にあって、生命力/(文字通りの)馬力/持久力などについて品種改良された雑種ということになるだろうか。1回のレース/数分間の競走で数億円の賞金—2023年の第68回有馬記念の1着(勝ち時計2分30秒9)本賞金は5億円—を稼ぎ出すサラブレッドもいるが、唐宋八家の一人韓愈は「雑説」において次のように説いている(清水, 1978, p.223)。「世に伯楽有って、然して後に千里の馬有り。千里

の馬は常に有れども、伯樂は常には有らず。」いかに馬がよく走ろうと、しょせんよく走る馬も人間によって作り出されるものにすぎない。「人が才能を発揮するには、その才能を十分認めてやる人が必要なのである」（清水，1978，p.226）。これらとはまったく違った状況として、馬肉を食用にする国や地域が国内外にかなり広範囲にわたってあるが、馬肉を食べることを禁忌（taboo）とする国や地域もある。

ちなみに、常用・臨時・パートタイマー・アルバイト等の属性、性、国籍、および年齢の区別なく適用される東京都の最低賃金は、2023年10月1日から引き上げられ、時間額1113円になっている（厚生労働省東京労働局，2023）。

いずれにしても、社会経済史の上からは、馬に限らず、野生の動物が人間によって飼われならされ、家畜化していく過程で交配—品種改良されて、人間社会に貢献してきた、といえそうである。

また、日本では一般にはあまり知られていないだろうが、実験動物・愛玩動物として交雑によって小型に品種改良されたミニブタ（miniature pig：mini-pig）は、科学の発展に少なからざる貢献をしたが、動物愛護の世界的な潮流の中で、イギリスでは実験用には使われなくなっている。ミニブタが品種改良され、さらに小型化したマイクロブタ（micro-pig）もある。「ミニ」も「マイクロ」もペットとしても飼育されるが、はたしてブタ君たちは本当に幸せなのだろうか。

この問題は、メンデル（Gregor Johann Mendel）が発見した遺伝に関する法則やダーウィン（Charles Robert Darwin）の進化論に絡めて論じなければならないのであろうが、筆者・真屋のその方面の知識は、中学校レベルで止まっており、メンデルの法則に、分離の法則、独立の法則、優性の法則の3つがあったこと、ダーウィンの主著『種の起源』に八杉龍一訳の岩波文庫版で目を通し、「生存競争は、あらゆる生物が高率で増加する傾向をもつことの不可避的な結果である」（Darwin（八杉訳），1990，（上）p.89）との件が妙に気になったことを、かすかに記憶している程度である。

〈雑婚〉

互いに異なる人種間での婚姻を雑婚といい、雑婚によって、雑種すなわち混血種が生まれる。こうした意味で、しばしばアメリカ合衆国は人種のるつぼといわれるが、その半面で、今にいたるもさまざまな人種差別が根深く残っている国とされる。対照的に、日本は、単一民族国家と自称してはいるが、多くの面で、たとえば、体格・体力、知力・語学力などで、アメリカはじめ欧米諸国に差を付けられる局面が少なからずあるのに対し、アメリカ社会では、自らの生得の人種的・民族的なアイデンティティが分裂しがちになり、人為的・政策的なその形成に努めなくてはならないことになる。歴史的には、キリスト教徒と非キリスト教徒の結婚や白人と非白人の結婚などが禁じられたりした時代があった。

国籍が異なる者が結婚する国際結婚では、多くの場合、人種・民族も異なるので国際結婚は雑婚の一種ということになるが、言葉の与える印象が違ってくる。

〈雑食〉

肉食・草食よりも雑食のほうが、栄養のバランスもよく、豊かな食事を楽しむことができ、食料の確保も相対的に容易で、健康・長命につながる。とはいえ、先進諸国のなかで

も飛びぬけて食料自給率が低い日本の現状—2022年度カロリー・ベース38%：同生産額ベース58%—を放置すると、遠からずとんでもない事態に直面することになるだろう。

また国際的には、今後一段と進む気候変動によって激甚化するであろう災害により住まいを失った災害避難民／海面上昇や砂漠化による気候難民（climate refugee）への対応には、まず食料はじめ生活物資の確保が不可欠であり、下部構造（infrastructure）と社会サービスの整備が最重要課題になる。物質的な豊かさの追求が、「過ぎたるは猶お及ばざるが如し」（吉川，1978，（中）p.39）になったのでは元も子もない。

〈雑穀〉

日本では米・小麦・大麦が主穀とされるのに対し、これらを除く穀類と擬似穀類を雑穀とするが、雑穀に豆類を含めるかどうかについては意見が分かれる。雑穀は、世界中で食糧や飼料として広く栽培されており、生産性が低い環境でも作付け可能であり、人類史の上からいうと、米以上に重要な農作物といえるかもしれない。なお、雑穀は、生物学的な分類ではなく、農学的な分類であり、栄養学や社会経済学などの視点からの議論もありえ、米に麦・粟・稗・黍・豆などを混ぜた五穀米が、近年の健康志向の高まりに連れて、人気を呼んでいる。

〈雑色〉

純色だけでは、鮮やかではあっても、目が疲れ、落ち着かないし、品がない。雑色が混在することによって、純色が一段と映える。そもそも自然界は純色だけでできているわけではなく、雑色が多く存在するのが、自然の姿であり、人間の手が入らない自然は、純色と雑色が混然一体となり、雄大にして微妙精緻千変万化で美しい。

松村君によると、雑色の対義語は禁色で、禁色は、古代の日本で皇族や貴族だけが着ることを許された色であり、一般の人びとが着ることを禁じられていた。対照的に、雑色は誰でも着ることができると指す。この指摘から、まず澤庵宗彭が巻き込まれた紫衣事件を思い出したのに続いて、かすかに記憶していた、まったく別の意味での「禁色」を取り上げた三島由紀夫の長編小説を数十年前に読んだことがよみがえった。

雑色を「ぞうしき」と読むと、意味が全く変わってくる。清少納言は『枕草子』で次のように評している（池田校訂，2007，p.83）。「雑色・隨身は、少し痩せてほそやかなるぞよき。男は、なほわかき程は、さるかたなるぞよき。いたく肥えたるは、いねぶたからんとみゆ。」現代語に訳すと、次のようになる（島内，2023，p.127）。「諸家で下働きをしている雑色や、貴人の身辺警護にあたる隨身は、ほっそりとした体型がよい。また、彼らを使う側である身分の高い男性も、若い頃は、そのように細身の体型がよい。ひどく肥っていると、眠たかろうと思われる。」つまり、こちらの雑色は平安時代におかれた役所「蔵人所」の下級の役人をいい、清少納言は、ほっそりした体型の男が好みだったようだ。

〈雑貨〉

世に雑貨と呼ばれる品々は溢れるほどあるのに対し、名器・名物・名品などと呼ばれるものは数少ない。万人の暮らしに欠かせないものは絶対に前者・雑貨である。これらなくして、私たちは1日たりとも暮らすことはできない、といってもけっして過言でない。名器・名物・名品、恐れるに足らずといえ、庶民の僻みになるか。

かつては身近にあった雑貨屋・雑貨店 (kick-knack shop (store) / variety shop (store) / general shop (store)) が今ではすっかり姿を消し、百円均一店 (dollar store (米) / pound shop (英)) が現代版の雑貨屋・雑貨店の様相を帯びてきている。雑貨を含む多種類の商品を1か所で大規模に販売する形態になると、雑貨屋・雑貨店ではなく、百貨店 (department store) といわれるようになり、扱う商品の多くが高級高価になる。

〈雑煮〉

雑煮がない日本の正月は寂しく侘しい。雑煮には地方・地域と家庭の流儀?があるようです。中国地方最大といわれる盆地にあった、子どもころの我が家の食生活は、けっして贅沢ではなかったが、雑煮は、少し見聞した限りでの情報を基準にすると、もっとも豪華な部類に属していたかもしれない。中学生のころまで、元旦には、歳の数だけ雑煮の餅を食べ、昼食抜きで過ごした。

- 1) ゆでた大きな丸餅。
- 2) 田舎味噌仕立ての汁。
- 3) 盛り沢山の具：削り鰹節／焼きのり／湯通しした食材：ごぼう、ほうれん草、するめ、鰯の切り身。

〈雑炊〉

酒を飲んだ後／鍋料理の後の雑炊は、身も心も豊かにしてくれる。とりわけ冷涼の秋や寒気厳しい冬の夜の雑炊は、こたえられない。個人的な好みで雑炊番付を作るとすれば、東西の横綱はフグとカニで決まり。残り少ない余命のうちで口にすることができるかどうか。

「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり」(伊藤, 2021, p.59) と詠んだ若山牧水は、この夜、一人静かに鍋を楽しんだのであろうか。それとも、明るいうちから酒を一人でぐいぐいあおるように飲むが、一向に酔えず、杯を重ねる。そのうち酔いつぶれて寝入ってしまう。翌日目覚めると、ひどい二日酔いで、迎え酒を飲むが、むろん効果はない。こうした状況が恒常化すると、寿命を縮めることになる。

ただし、1928年没の牧水の享年は44歳、当時(1926-1930年)の日本人男子の平均寿命が44.82歳であることからすると、彼は取り立てて短命だったわけではない。ちなみに、厚生労働省「令和4年簡易生命表」によると、日本人の平均寿命は、男81.05年(世界第4位：第1位スイス81.6年)、女87.09年(同第1位)で、1世紀足らずの間に2倍近くにまで伸びている。

〈雑菌〉

雑菌は、人間の意図に反して増殖した微生物(特に有害な細菌や菌類)の総称で、通常、環境に普遍的に存在する微生物に由来する。これらの環境微生物のことを指す一般的な名称として用いられる場合は、ウイルスや細菌、菌類全般を意味する黴菌(ばいきん)とほぼ同義に用いられる。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)によって人類の生存が危ぶまれたのは、2020年前後のことである。ある時点まで一般的な暮らしの中では「雑」扱いであった微生物が、ある日突然、人類に牙をむく可能性が今後増大しなければ幸いだが、今この時も、おそらくどこかで何者かが細菌兵器の開発に取り組んでいることだろう。

〈雑技〉

民間で行われるさまざまな技芸を雑技というが、「雑」の域をはるかに超えているのが中国のサーカス「雑技」。実に楽しく素晴らしい。日本の歌舞伎に相当するのが中国の古典演劇・京劇といえようか—古典演劇には京劇のほかに、さまざまな時代の地域性を有する「雑劇」もある。これらも面白いが、こちらは中国語を知らなければ、面白さも半減するのに対し、雑技を堪能するのに中国語は不要。子どものころのある時期まで、秋祭りに合わせて興行があった木下サーカス、矢野サーカス、キグレサーカスの空中ブランコやバイク・サーカスを、手に汗を握って見たことが思い出される。そのころは、サーカスという言葉は知っていても、「雑技」という言葉があることは知らなかった。

〈雑音〉

耳障りな音／邪魔な音を雑音というが、これを積極的に利用することによって盗聴を防止できる。その一方で、2023年夏の甲子園球場での高校野球の頂点をかけての試合での応援団？の大声援・大音響が、試合の行方を決めた、との声がしばらく喧しかった。また、ある人にとっては妙なる音／心安らぐ音／精神が興起する音＝音音楽も、他の人にとっては、単なる雑音騒音でしかなく、不快を通り越し、しばしば非常な苦痛に感じられることさえある。

〈雑踏〉

人ごみ・混雑した状況を雑踏という。何らかの事情で逃亡を試みる必要があるとき、雑踏に紛れ込むと、逃げ切ることができる可能性が高まる。ジョン・ヒューストン (John Huston) 監督による戦争とサッカーを柱にした映画「勝利への脱出 (Escape to Victory, 1981)」の幕切れを視よ—余談ながら、この作品には、サッカーの王様 (The King of Football) と呼ばれたペレ (Pelé: Edson Arantes do Nascimento) が、ドイツ軍チームから人種差別的なラフ・プレイを仕掛けられる黒人選手として出演している。

しかし雑踏の密度が増し、無秩序状態に陥ると、混乱が生じ、大惨事を招くことにもなる。これを雑踏事故・群衆事故・群衆雪崩といい、近未来における発生が現実視されている首都圏直下型地震の際、未曾有の人的・社会的な大混乱が起こる可能性が非常に高い。2001年7月の明石市民夏まつり花火大会では、死者11名、負傷者47名 (2001年12月31日現在) が出ている (明石市民夏まつり事故調査委員会, 2002, p.1)。

〈雑人〉

日本の歴史において、身分の低いものを雑人と呼んだ時代があったが、これらの人たちが、虐げられながら、最底辺において当時の社会を支え、たくましく生きていた。鎌倉時代になると、公家、武士・郎党の身分を持たない庶民・賤民を一括して、「雑人」「凡下 (ぼんげ)」「甲乙人 (こうおつにん)」と称して区別するようになった。

〈雑木〉

薪や炭にする以外用途がほとんどない木を雑木という。雑木には、雑草と異なり、多くの人たちが知っている名前があった。かつて身近に雑木林があった時代には、今のよう花粉症が多くの人びとを苦しめることはなかったことからすると、雑木林は人間を花粉症から守ってくれていた、といってよく、その名とは裏腹に、大そうな役目を果たしてくれ

ていたわけだ。

今や花粉症は、その対策に国を挙げて取り組まなければならないほどの大問題になり、政府は、2023年10月11日、花粉症への対策を話し合う関係閣僚会議を開き、スギの人工林の伐採や、花粉の少ない苗木への植え替え、などを重点的に実施する区域を2023年度中に設定すること、などを盛り込んだ対策のパッケージを取りまとめた。

〈雑魚〉

安価な小魚を雑魚（ごこ）という。転じて、周囲から評価されず見下されている者に対して、比喩的に雑魚—雑魚は相手にしない—というが、雑魚が多くいなければ、大きな魚が育たないし、英雄・豪傑も目立たなくなってしまう。引き立て役としての雑魚は、生存競争が激しい弱肉強食の社会にとって必須の存在であり、今様には Respect しなければならない、というよりも、うっかり使うと、差別として糾弾される言葉。雑輩—取るに足らない人物／小物／有象無象の意—といえは、ほんの少し格調が高くなるかもしれないが、こちらは今や死語同然。

シラスは、さまざまな魚の仔稚魚の総称であるが、近年人気の高い生シラスやシラス干しは、カタクチイワシの仔魚がほとんどである。イワシ類（カタクチイワシ、マイワシ、ウルメイワシ）の稚魚を水揚げした後、食塩水の釜で茹で上げ、天日に干して乾燥させたものをチリメンジャコ／シラス干しという。縮緬雑魚（ちりめんじゃこ）といわれるようになったのは、釜茹でした稚魚をセイロに広げて干しあげる様子が、絹織物の縮緬に似ていることからきたようだ。

歴史的には、宗教行事などで、おおぜいの男女が一堂に集まって、雑魚のように入りまじって寝る風習を雑魚寝といったが、この言葉は今も生きている。

〈雑巾〉

ごく日常的に見られたのが、本来の目的には適さなくなった衣類や布—多くは木綿—を裁断し縫い合わせて、拭き掃除に使う光景。この布切れを雑巾といい、拭き掃除を雑巾掛けと称する。日本が貧しかった時代における生活の知恵—節約儉約の代表的な事例—であり、資源の有効活用の単純素朴な先駆の形態。かつて身の回りに雑巾のない暮らしはなかった。雑巾で拭き掃除をしても、殺菌消毒の効果はなく、むしろ雑巾そのものが雑菌の温床になっていた。小学校の家庭科の時間に運針を教わり、雑巾を縫った記憶がある。

〈雑囊〉

雑多なものを入れる袋を雑囊という。「囊」は「ふくろ」を意味し、雑囊には肩掛け紐や背負い紐がついていることが多い。今日では死語に近く、カタカナ英語のハンドバッグ handbag, ショウルダ・バッグ shoulder bag, トウト・バッグ tote bag, リュック・サック rucksack, ナップサック knapsack, バックパック backpack などが日本語の中に定着した感がある。ハンド=手、ショウルダ=肩、バック=背（中）の意味は、小中学生でも知っているであろうし、bag と sack が袋、pack が荷物・梱包を意味することも知っているだろう。

だが、トウト、リュック、ナップの原義を、果たしてどの程度の人が知っているだろう。筆者は恥ずかしながら本小論を書くにあたって英和辞典を引くまで知らなかった。『新英

和大辞典 第6版』によると、tote の訳語として真っ先に出てくるのは、他動詞「(米口語) (かかえたり背負ったりして) 運ぶ」で、名詞としては「(口語) 背負うこと」、tote bag は「(米) トートバッグ (大きな角型の (手さげ))」、tote board は「(口語) 掛け率表示盤」、rucksack (背囊) は南ドイツ方言から、knapsack (背囊) もドイツ語からきていることがわかり、とても面白かった。

〈雑居〉

いろいろのものや動物や人が、混ざり合って存在・居住している状態を雑居という。複数の家族が1軒・1戸の住まいで生活している状態を雑居家族という。業種や業態などが異なる複数の企業や個人が同一の建物に同時に入居し活動している状況を、雑居ビルという。また、刑務所や留置場や拘置所で複数の受刑者や被告人や被疑者が居住する空間を雑居房という。雑居は、住宅や社会施設などが未整備で、社会的貧困が一般的な状況下でみられる現象で、社会が物質的に豊かになり、生活の基盤が大家族から核家族に移っていくにつれて、姿を消していったが、いまだに日本の経済社会には雑居ビルによって支えられている面が多い。

ちなみに、厚生労働省「2021年 国民生活基礎調査の概況」によると、1986年の単独世帯682.6万世帯／三世帯世帯575.7万世帯から、2021年には、それぞれ1529.2万世帯／256.3万世帯へと、大きく変化してきている。

〈雑収入〉

本来の事業とは関連しない取引で生まれる収益で、営業外収益の勘定科目の一つ。他のいずれの勘定科目にも該当せず、独立の科目にするほど金額的に重要でない、還付金・報償金・保険金・契約者配当金・損害賠償金など、少額の収益を雑収入・雑益という。名目は何であろうと、増収は、とりあえずうれしい。

〈雑所得〉

利子所得、配当所得、不動産所得、事業所得、給与所得、退職所得、山林所得、譲渡所得、および一時所得のいずれにも当たらない所得を雑所得という。世界最高水準の高齢社会・日本では、国民年金・厚生年金に代表される公的年金が、退職後・老後のわれわれの生活を支える支柱になり、社会保障給付費の国内経済に占めるその重みは、この40年余りの間に2倍以上になり、年金給付費は6倍近くにまで増加している(表1参照)。OECD加盟主要国をみても、年金と医療で社会保障給付の60-80%を占めている(表2参照)。ことほど重要な社会経済的な意義を有するにもかかわらず、公的年金は「雑」扱いされている。何とも奇妙な話だが、「雑」畏るべし。国民皆年金体制下で、年金生活者がここまで増えてくると、年金所得を独立の範疇とし、少なくとも一定額までは一たとえば、国民年金は全額一非課税にするなどの措置を講じてよいのではなかろうか。

ちなみに、厚生労働省「厚生年金保険・国民年金事業年報」によると、2021年度の公的年金受給者数(延べ人数)は7698万人、年金総額56兆円(国民所得の14%)になっている。これでも「雑」扱いなのである。金額の多少もさることながら、その社会経済的な重要性に鑑み、少なくとも公的年金給付は明確に年金所得として位置付けてよいのではなかろうか。これによって人びとの年金に対する意識も少しは変わるだろう。

表 1 日本の社会保障給付費の推移

年度	1980	2000	2020	2023
国内総生産 (兆円) A	248.4	537.6	535.5	571.9
給付総額 (兆円) B	24.9 (100.0)	78.4 (100.0)	132.2 (100.0)	134.3 (100.0)
(内訳) 年金	10.3 (41.4)	40.5 (51.7)	55.6 (42.1)	60.1 (44.8)
医療	10.8 (43.2)	26.6 (33.9)	42.7 (32.3)	41.6 (31.0)
福祉その他	3.8 (15.4)	11.3 (14.4)	33.9 (25.6)	32.5 (24.2)
B/A (%)	10.0	14.6	24.7	23.5

資料：国立社会保障・人口問題研究所「令和3年度社会保障費用統計」, 2022-2023年度は予算ベースで、厚生労働省推計。

注：「内訳」カッコ内の数値は給付総額に占める比率 (%)。

表 2 社会保障給付の部門別の国際比較 (対 GDP : 2019 年)

	フランス	スウェーデン	アメリカ	日本	イギリス
年金	14.3 (45)	7.7 (30)	7.8 (32)	10.0 (43)	6.6 (33)
医療	9.3 (30)	6.6 (26)	14.2 (59)	9.6 (41)	7.9 (39)
福祉その他	7.9 (25)	11.2 (44)	2.2 (9)	3.5 (15)	5.6 (28)
合計	31.5 (100)	25.5 (100)	24.0 (100)	23.1 (100)	20.1 (100)

資料：OECD, Social Expenditure Database に基づき、厚生労働省政策統括官 (総合政策担当) 付政策統括室で算出した数値。

注：カッコ内の数値は給付合計に占める比率 (%)。

4. 「雑」賛歌

世にある種々の「雑」が、いかに有用であり、無視できないかについて、いくつかの事象事例を思いつくままに取り上げてきた。

「ヨハネ伝福音書」12章24節に、「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし」(翻訳委員会訳, 2015, p.240)とある。とすると、いつの世にも、形を変え、姿を変えることはあっても、絶えることなき「雑」は、「多くの果」を結ぶことができないことになるが、「雑」には「死なず」して増え続ける摩訶不思議な力が宿っている、といえるのではなからうか (画像3参照)。

近頃、目障り、耳障りで、鼻につく、上っ面だけ、文字面だけで、実質を伴わない言葉「リスペクト」の対象にならずとも、どっこい「雑」は「雑」として立派に自らの生命を謳歌し続けている。「雑」の冠をかぶせることはなくても、私たちの周囲には「雑種」「雑物」があふれかえっている。住まい、家具、電化製品、その他、自ら作っておいて、その

処理に困る「雑」、すなわち「雑多な化学物質・化合物」を含まないものは何一つない。だからといって、身近にある化学物質・化合物の名前を一つ一つ覚えていたのでは、脳が爆発するだろうし、肝心の暮らしが成り立たない。「雑」として扱われることすらない多種多様大量のモノに囲まれて生活しているのが、現代日本人である。こうしたことから思い起こされるのが、次のカント (Immanuel Kant) の言葉である (Kant (篠田訳), 2002, p.205)。「我々は、カテゴリーによるのでなければ、対象を思惟することができない。またこの概念即ちカテゴリーに対応する直観によるのでなければ、思惟された対象を認識することができない。」

世界的な潮流として社会的包摂 (social inclusion) が重視され、包摂社会 (the inclusive society) の構築が求められている今、私たちは、身近に存在する「差別」や「偏見」にも通じる「雑」に対する問題意識をよりいっそう研ぎ澄ます必要があるのではなからうか。たとえば、しばしば「雑」の指標・基準にされる人種・民族・国籍、性別、年齢、宗教、言語、教育・学歴、職業・職種、障害・傷病、容姿、LGBTQ (lesbian, gay, bisexual, transgender, or queer) などに基づく差別や偏見など、現代社会において日常的に見られる現象である。筆者が研究対象として長年取り組んできた社会保障や社会福祉に係る諸制度の背後には、これらの要因が必ず存在している。20世紀末に存在した政治団体・雑民党は社会的支持をほとんど得られなかったが、その主張には、これらの問題に通じる論点が含まれていた。

高齢化した主要先進諸国における社会保障 (関連) 諸制度のなかで財政的に比重が大きいのは年金と医療 (表2参照) で、日本の社会保障給付費の2023年度予算ベースでみると、45% (表1参照) である。公的年金制度は、もっぱら金銭の流通を国民的な規模において管理統制する仕組みで、その大宗は保険料の徴収と年金の支給に尽きる。その背後／水面下には、保険料を負担する主として現役世代と年金を受給する主として退職世代の現実の暮らし／生活があるが、年金をめぐる政策論議では、ミクロ的には負担と給付、マクロ的には長期的な年金財政の均衡が重視され、年金加入者＝保険料負担者と年金受給者＝元保険料負担者の現在 (および未来) の暮らしの実態そのものが議論の前面全面に出てくることは少ない。はたしてそれでよいのかどうか。制度としての公的年金の数字の上での整合性よりも大切なのは人びとの暮らしであることが忘却されては、社会保障本来の目的からして本末転倒なのである。年金制度にとっては、「雑多な要因・与件」ともいえる事項事象をいかに把握し、それを政策・制度にいかん反映させるかのほうが、年金制度の保険数理的な美しさの追求よりも各段に重要なことを再認識する必要がある。年金制度は政策手段の一つにすぎず、政策目標ではない。

5. 付論：言葉と誠意

〈正〉反若手論 (真屋)

先ごろ年金関係の誰もがその存在を知っているはずの全国の拠点数312カ所・正規職員数約1.1万人 (2023年4月) の巨大組織・日本年金機構の会合に出たところ、しきり

に「若手（職員）」という言葉が文書に出てきました。これに対して、筆者・真屋は、「若手」は不明確な概念で、人間を「単なる働き手」＝「労働力の提供者」としか見ておらず、見方によると年齢差別にも通じて、不適切ではないか、と疑問を呈しました。

「若手」「中堅」「古参」「古株」「ベテラン」などの区分は何を基準にするのか。年齢や勤務年数だけではなさそうで、知識、情報量、経験、技能、判断力、洞察力、理解力、分析力、適応力、表現力、説得力、決断力、将来性・可能性、人間関係、体力などなど、実にさまざまな基準が考えられ、難しいところです。極端な事例になるかもしれないが、前掲のAI（人工知能）を超える、といわれる一彼は人間なのだから、当然といえば、当然だろう—藤井聡太さんなどは、21歳という年齢からすると、「若手」といえるかもしれないが、上記の知識から体力にいたるすべての項目において、「若手」などという安直な表現では片付けられない斯界一といえる最高水準に達している。

藤井さんを静の世界の人とするならば、動の世界の職業野球では、2022年に村上宗隆選手が史上最年少の22歳で打者としての最高峰ともいえるべき3冠王を達成したほか、数々の最年少記録を打ち立てたことは記憶に新しい。藤井さん同様、年齢だけで、彼を「若手」としてくくってしまってよいものかどうか。村上選手は2023年に成績をかなり落としたが、それでも、本塁打リーグ2位、打点同4位、打率同20位なのだから、その非凡さを認めざるをえないであろう。

まさに「後生畏るべし」（吉川，1978，p.313）。

〈反〉誠意と品格（松村）

「若手」という言葉の使い方に、どこか、違和感を覚えるというご意見ですが、使われ方によっては、狡さ、いやらしさを感じたことが、私の40年に及ぶ教員生活の中であります。学校行事の役割分担、部活の顧問を決める時、引き受け手がない時、古参の教師が「ここは、若手に勉強していただいたらどうでしょう」といって、古手が若手に仕事を押し付け、彼らは楽に立ち回る。古手が若手に仕事を押し付ける時の、おためぐかしのイメージがあります。もちろん、若く元気で、有望な働き盛りの意味も大切です。言葉というものは、誠意をもって使わないと、品格がなくなります。若手の対義語は一般的には古手。古手の対義語を新手としたものもある。

〈合〉誠意雑考（真屋）

(1) 松村君の上掲「誠意と品格」で、もっとも印象的だったのは、「言葉というものは、誠意をもって使わないと、品格がなくなります」という件です。なるほど国語・国文学の専門家だけのことはある。「言葉」と「誠意」：筆者・真屋は、「言葉・文章」の「論理性」を真っ先に考え、「言葉」を「知性／理性／感性」と結びつけることはあっても、ついで言葉から「誠意」を想起することはなかったように思う。

敬語によって「誠意」を示すことが少なからずあるが、社会生活の中では、「誠意」の有無濃淡に関わりなく儀礼的に敬語を使うことが少なくない。大方の挨拶状、たとえば、年賀状は敬語（謙讓語・尊敬語・丁寧語）の見本市のようなものだが、それらのほとんど、とりわけ企業や団体などから届く年賀状は100円均一店で購入可能な商品といったところで、手軽ではあっても、本来的な意味での「誠意」がこもっているわけで

はない。

(2) 言葉で誠意を示し、誠意を相手にどのように伝えるか。福沢諭吉が、「speech」に「演説」の訳語をあて、これを奨励するために三田に演説館を建てたことは広く知られているが、古来、洋の東西を問わず、「口八丁、手八丁」「舌先三寸」「巧言令色鮮仁」「三寸不爛の舌」「雄弁は銀、沈黙は金 (Thomas Carlyle : Speech is silver, but silence is golden.)」などといわれ、「口は禍のもと」になることが多い。その一方で、「文は人なり (Comte de Buffon : Le style est l'homme lui-même.)」ともいわれることからすると、言葉は使い次第で、その人物の品性・評価を高めることにも貶めることにもなる。

(3) フランク・キャプラ (Frank Capra) 監督のアメリカ映画「スミス氏都に行く (Mr. Smith Goes to Washington, 1939)」は、当時の日本では作ることができなかった言論の素晴らしさを肩肘張らずに描いた傑作の一つで、主演のジェイムズ・ステュアート (James Stewart) は「アメリカの良心」を演じる俳優としてピカイチだった。

この映画は、アメリカ合衆国連邦議会上院における議事妨害の手法 *filibuster* について知っている、一段と楽しめる。連邦議会上院で演説を延々と続け、議事進行を妨げることを *filibuster* (オランダ語 *vrijbouter* : 略奪者・海賊に由来) という。これは、上院では議員の発言時間に制限が課されず、席に座らず立ったまま演説を続け、本会議場を出ないでいる限り、何時間でも演説し続けられる、という伝統によるもので、21世紀になってからは、2013年9月に Rafael Edward Cruz (Ted Cruz) が医療保障制度改革法 Patient Protection and Affordable Care Act (Affordable Care : Obamacare) に反対の立場から行った21時間19分の演説が最長とされるが、上には上があり、1957年の Strom Thurmond の公民権法 (the civil rights act) に対する演説は24時間18分続いた、という (*New York Post*, Sep. 25, 2013)。

日本には、議事妨害の手法として知られている牛歩戦術がある。言論の府たるべき議会での無言の行ともいうべき、この戦術、その効果のほどといい、はたしていかなものか。

(4) 閑話休題。対面での会話ならば、表情や身振り手振りなどをまじえて、丁寧な言葉で相手に誠心誠意訴える。これには、服装も関係してくるであろう。時と場合によっては、服装に関する厳重な規則 (dress code) が定められていることさえある。すなわち俗界で大切なのが、服装を含めての言動／拳措なのである。しかし、これで、どのような状況でも、誰にでも、そこに込められた「誠意」の「質と量」がそのまま伝わる、とは限らないし、多くの言動／拳措は、一時的・部分的に記憶されることはあっても、多くは瞬時に、あるいは時間の経過とともに記憶が薄れ、ついには消え去る。

(5) 映画や演劇でならば、虚構の世界での演技で真実を越える「誠意」を表現し、虚構の世界での相手を感じさせる以上に、観客を感じさせることもあるが、これは、おそらく、現実の世界での「言動」による「誠意」の表出が非常に少ないことの裏返しであろう。日常的にはありえない／まず経験しないことに、虚構の世界で触れることによる精神の興起高揚といったところで、持続性に乏しく、日常生活に反映されることは少ない。

「痛みに耐えて、よく頑張った。感動した。おめでとう。」これは、2001年の大相撲

夏場所千秋楽の表彰式で、当時の小泉純一郎首相が演劇的な口調で発した言葉で、少し話題になったが、相撲通でも、このことを覚えている／知っている人が、はたして今、何人いるだろうか。

(6) 文書での「誠意」の表明ならば、後に残り、何度でも繰り返して、「誠意」の質を吟味しなおすことも可能になる。しかし、これも、いってみれば、紙切れ1枚の話にすぎないし、インターネット上での発言・言葉は瞬時に削除されることさえある。さほどに軽く、ときに非常に無責任かつ不誠実でさえある、近年は少なくなったようだが、祝電・弔電の類で、聴く人・読む人に感動を与えるものは、筆者の記憶・経験では、まずなかった。もっとも今は映像付きで言葉を残すことが可能なので、少し状況に変化が生じているかもしれない。

(7) 再度脱線。知るかぎりでのほとんど唯一の例外が、今の時代には合わない内容ながら、漢字文化圏で歴史上もっとも有名な文書の一つ、諸葛亮孔明の「出師表」で、後世、これを読んで涙しないものは不忠者といわれた。相当長いので、本文末尾に「付注」として邦訳を付記する。文筆家である林真理子さんは、当然ご存知のはずだが、どうだろう。彼女の側近に孔明のような人物がついていれば、あれほどまでの醜態をさらさなくてすんだらうに。もっとも、孔明をもってしても蜀漢を救うことはできなかったのだが。

それにしても「出師表」は格調高く力強い名文である。今どき、この種の名文を自由自在に操れる日本人はおそらくほとんどいないであろうし、辞書なしで、内容を正確に理解できる日本人も少ないであろうし、辞書を片手に「出師表」に目を通す者もさして多くはいないであろうから、『三国志』の愛読者であっても、「出師表」を熟読玩味し、今の時代に感激し涙する者は、軽々には判断できないが、無きに等しいのではあるまいか。先帝「劉備」の人物像・事跡の虚実は別にして「劉」に連なる者としての漢王室再興に賭ける彼の執念はともかく、現代人の目からすると、彼がそれほどの英雄豪傑であった、とは考えにくく、ましてや後主「劉禪」にいたっては、何をかいわんや、といったところで、「三顧の礼」にほだされ、仕えるべき主を選び間違えたことに、あの聡明な孔明は秘かに涙し、きっと自らの不明を恥じたのではなからうか。自らそれを口にすることはできない。むしろ痩せ我慢を貫かなければならなかった。

(8) 「誠意」とは直接関係ないが、「出師表」とは対照的に、最も簡潔で印象的な、筆者の好きな「語句」を3つ挙げておこう。

(a) 自由平等友愛 (liberté, égalité, fraternité)

18世紀末のフランス革命期に由来するフランス共和国の標語。1948年の国際連合総会で採択された世界人権宣言の第1条にもこの標語の精神が継承された。「自由」と「平等」はときに鋭く対立することがあるが、そこを「友愛」の理念で調和させる。これが成熟した市民社会のあるべき姿、ということにならうか。現実には、多くの場合、総論賛成、各論反対、ということになりがちだが。

(b) 人民の、人民による、人民のための政治 (the government of the people, by the people, for the people)

アメリカ合衆国の歴史においてもっとも有名な1863年の合衆国大統領A. リンカー

ンによるゲティスバーグ演説 (The Gettysburg Address delivered in 1863 by President Abraham Lincoln) 中の句。日本国憲法前文には「そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する」とある。

〈c〉冷めた頭脳と温かい心情をもって (with cool heads but warm hearts)

1885年のA. マーシャル (Alfred Marshall) のケンブリッジ大学教授就任講義「経済学の現状 (The Present Position of Economics)」の中の句 (Marshall, 1885, p.57)。マーシャルは、1907年に論文「経済騎士道の社会的可能性 (The Social Possibilities of Economic Chivalry)」において、「公共的な精神 (public spirit)」「助けを必要とする人びとを援助することを喜ぶ心 (a delight in succouring those who need a helping hand)」の大切さについても強調している (Marshall, 1907, p.14)。

さしずめ、その「固い決意」「高い志」「強い愛校心」(日本大学理事長候補者選考委員会, 2022, pp.2-3) が理事長候補選考委員会に評価された林真理子さんなどは、大学人としての cool head と warm heart の均衡が後者に著しく傾いたお方のように、残念至極。

(9) 多くの人々が経験もしているだろうが、誠意を言葉で表すことは、至難の業である。そこで登場するのが、言葉を補う形ある「もの」、その象徴としての金品とりわけ金銭である。誕生祝い・入学祝い・結婚祝いを贈る／香奠・病気見舞いを包むなどが、日本では一般的だが、多くの要因が重なり合って形成される世間相場とでもいうべきものが、それぞれあるようだ。一般的に金銭は「多々益々弁ず」ということになろうが、この世間相場は少し違うようで、加減が難しい。

「現実性、存在、宇宙、超自然的事柄、神性などにかかわる信仰と、その信仰から生ずる慣行の体系、この体系には通常、礼拝と道徳的規定が含まれ、またしばしば祈り、観想、服従、瞑想が含まれる」(Kennedy (田丸監修), 1991, p.113) とされる宗教界においてさえ、献金・報謝の多寡が信仰心＝誠意を表わす指標とされることがある。古くは、16世紀における宗教改革最大のきっかけにもなったカトリック教会による贖宥状・免罪符の販売が有名であるが、現在も宗教法人格を与えられた宗教団体に対する献金が社会問題化し、献金被害という言葉まで生まれている。こうした点も含め、哲学者・経済学者にして革命家でもあった19世紀最大の知の巨人の一人が、1844年に次のように宗教を断罪している (Marx (城塚訳), 2021, p.72)。「宗教上の悲惨は、現実的な悲惨の表現でもあるし、現実的な悲惨に対する抗議でもある。宗教は、抑圧された生きものの嘆息であり、非情な世界の心情であるとともに、精神を失った状態の精神である。それは民衆の阿片である。」

政治家諸氏が盛んに開く大規模の政治資金パーティではパーティ券の購入枚数＝購入金額が、また政治献金では献金額が、後々陰に陽に物をいうらしく、誠意は、金銭＝祝儀袋の厚みによってのみ図られる。内村鑑三が選んだ代表的日本人の一人西郷隆盛は、次のように述べている (内村 (鈴木訳), 1992, p.44)。「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困るもの也。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして

国家の大業は成し得られぬなり。」とすれば、今どきの政治家諸氏の大半は、扱いやすいことこの上なく、金さえ与えれば、どうにでもなるが、彼ら彼女らに国家の大事を任せられない、ということになり、日本の将来は暗い。

いわゆる八百長は論外として、職業スポーツの世界では、契約当事者の一方の誠意＝評価は基本的に金銭的報酬＝契約金でのみ提示され、スポーツ新聞の紙面に報酬をめぐる交渉「銭闘」という造語？新語？が連日のように踊ったことが、一時期あった。その一方で、フェア・プレイ＝正堂堂・公明正大な行動態度が大前提のはずのスポーツ界においても贈収賄は珍しくない。先ごろ（2021年）開催の東京五輪では金メダルをめぐる一流選手の白熱の闘いよりも、19世紀前半のフランスを代表する作家バルザックの『人間喜劇』（Honoré de Balzac, *La Comédie humaine*）をしのぐ金まみれの様々な裏取引の醜怪さのほうが、税金を通じて、驚愕すべき巨額の五輪経費の一部を負担させられた者としては腹も立ったが、はるかに面白かった。

ちなみに、会計検査院（2022）「国会からの検査要請事項に関する報告 会計検査院法第30条の3の規定に基づく報告書 東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた取組状況に関する会計検査の結果について」によると、大会のために国が負担した経費3641億余円、大会の総経費1兆6989億余円かかっている。

マキャベリ（Niccolò Machiavelli）の言葉を引いて、本稿を閉じる。「人間は誰でも目の前にある目的を達すること、すなわち名誉と富を手に入れることに賭けては種々さまざまな行動をするもので、ある者は控え目に他の者は勇敢に、ある者は腕づくで他の者は謀で、ある者は辛抱強く他の者はその逆を行き、こうしてさまざまな流儀で事を運んでそれぞれに目的を達することができる」（Machiavelli（大岩訳），1967，p.177）。このように述べたマキャベリではあったが、晩年は失意のうちに病を得て急死した。

付注：出師表

臣亮 もうす、先帝 業を創むること未だ半ばならずして、中道に崩殂れたまい、今天下三分して、益州疲弊せり。これ誠に危急存亡の秋なり。然れども侍衛の臣 内に懈らず、忠義の士 外に身を忘るるは、蓋し先帝の殊遇を追い、これを陛下に報いんと欲すればなり。誠に宜しく聖聴を開き張げて、以て先帝の遺徳を光にし、志士の気を恢弘めしむべし。妄りに自ら菲薄じて、喩えに引きて義を失い、以て忠諫の路を塞ぐべからざるなり。宮中・府中は俱に一体に見、臧否を陟せ黜くるに宜しく異同あるべからず。もし姦を作して科を犯し、また忠善をなす者あらば、宜しく有司に付して、其の刑と賞を論定せしめ、以て陛下の平明の治を昭らかにすべし。偏私りて内外にて法を異にせしむべからず。

侍中・侍郎郭攸之・費禕・董允らはみな良実にして、志慮忠純なり。是を以て先帝、簡び抜いて以て陛下に遺したもう。愚 以為えらく、宮中の事は、事の大小と無く、悉く之に諮り、然る後に施行せば、必ず闕漏たるを裨補い、広く益する所あらん。將軍向寵は性行淑均にして、軍事に曉暢せり。昔日に試みに用いられ、先帝 これを称して「能あり」と曰えり。是を以て衆議して寵を挙げて督と為す。愚 以為えらく。營中の事は、事の大小と無く、悉くかれに諮らば、必ず能く行陣をして和ぎ穆まじく、優れしも劣りしも所を

得しめん。

賢臣を親しみ、小人を遠ざけしは、これ先漢の興隆せし所以、小人を親しみ賢臣を遠ざけしは、これ後漢の傾頽えし所以なり。先帝の在せし時、毎に臣と此の事を論じ、未だ嘗て桓・靈二帝に歎息痛恨せずんばならず。侍中・尚書・長史・参軍は、これ悉く貞良にして節に死するの臣たり。願わくは、陛下 これを親しみ、これを信ぜられなば、すなわち漢室の隆えんこと、日を計えて待つべし。

臣 もと布衣、躬ら南陽に耕し、苟くも乱世に生命を全うせんとし、聞達を諸侯に求めざりき。先帝 臣が卑鄙しきを以いたまわず、猥りに躬自ら枉げて、三たび臣を草廬の中に願いたまい、臣に諮るに当世の事を以てせられる。是に由り感激して、遂に先帝のために駆馳せんことを許えり。後、傾覆に値うて、任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉ぜり。爾りしよりこのかた二十有一年なり。先帝は臣の謹慎なるを知り、故に崩ずるに臨みて、臣に与するに大事をもつてしたまえり。

命を受けてより以來、夙夜憂慮し、付託の効あらず、反って先帝の明を傷なわんことを恐る。故に五月、瀘を渡りて、深く不毛の地に入りぬ。今や南方すでに定まりて、兵甲すでに足れり。当に三軍を獎率いて北のかた中原を定むべし。庶くは臣が駑鈍を竭し、姦凶を攘い除き、もつて漢室を復興し、旧都に還らんことを。これ臣の先帝に報じ、また陛下に忠ある職分なり。規益を斟酌し、忠言を進め尽くすは、攸之・禕・允の任なり。

願わくは陛下、臣に託するに賊を討ちて興復の効を以てせられんことを。もし効あらずんば、臣の罪を治して、以て先帝の靈に告げたまえ。もし徳を興すの言なくんば、攸之・禕・允らを戮して、その慢を彰かにしたまえ。陛下もまた宜しくみずから謀りて、善道を諮い誦り、雅しき言を察納し、深く先帝の遺詔を追いたもうべし。恩を受けて感激に勝えず。いま当に遠く離れんとし、表に臨んで涕泣し、云う所を知らず。

* 小川ほか訳、1988, pp.16-19, 「第九十一回 瀘水に祭つて 漢相 師を班し 中原を伐たんとして 武侯 表を上る」からルビを省略して引用。

〈主要参考文献〉

明石市民夏まつり事故調査委員会 (2002) 「第 32 回明石市民夏まつりにおける花火大会事故調査報告書 (概要版)」 (<https://www.city.akashi.lg.jp/anzen/anshin/matsurijiko/documents/gaiyou.pdf> : 2023 年 11 月 5 日取得。)

浅田次郎 (1999) 『勇氣凜凜ルリの色』 (講談社文庫) 講談社。

池田亀鑑校訂 (2007) 『枕草子』 (岩波文庫) 岩波書店。

イソップ (山本光雄訳) (1978) 『イソップ寓話集』 (岩波文庫) 岩波書店 : 〈底本〉 Chambry, Émile (1927) *Ésope fables, texte établi et traduit.*

出光美術館編集・発行 (2023) 『江戸時代の美術 「軽み」 の誕生』。

—ホームページ「展示概要」 (<http://idemitsu-museum.or.jp/exhibition/present/> : 2023 年 10 月 22 日取得。)

伊藤一彦編 (2021) 『若山牧水歌集』 (岩波文庫) 岩波書店。

井原西鶴 (堀切実訳注) (2009 (1688)) 『新版 日本永代蔵 現代語訳付き』 (角川文庫) 角川学芸出版。

- 内村鑑三（鈴木俊郎訳）（1992）『代表的日本人』（岩波文庫）岩波書店：〈原著〉Uchimura, Kanzō（1908）
Representative Men of Japan.
- 小川環樹・金田純一郎訳（1988）『完訳 三国志（七）』（岩波文庫）岩波書店：〈底本〉毛宗崗『三国演義』。
オブリ，オクターヴ（大塚幸男訳）（1996）『ナポレオン言行録』（岩波文庫）岩波書店：〈原著〉Aubry,
Octave（1941）*Les pages immortelles de Napoléon: choisies et expliquées.*
- 会計検査院（2022）「国会からの検査要請事項に関する報告（検査要請）会計検査院法第30条の3の規定に基づく報告書 東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた取組状況に関する会計検査の結果について」令和4年12月（https://report.jbaudit.go.jp/org/pdf/041221_zenbun.pdf：2023年11月1日取得。）
- 川崎市総合教育センター「川崎の花」「ハキダメギク」（<https://kawasaki-edu.jp/index.cfm/19,1929,70,206.html>：2023年10月23日取得。）
- カント，イマヌエル（篠田英雄訳）（2002）『純粋理性批判（上）』（岩波文庫，岩波書店：〈原著〉Kant, Immanuel（1787）*Kritik der reinen Vernunft.*
- 倉野憲司校注（2020）『古事記』（岩波文庫）岩波書店。
- 厚生労働省「厚生年金保険・国民年金事業年報（令和3年度）」（https://www.mhlw.go.jp/topics/bukyouku/nenkin/nenkin/toukei/nenpou/2008/dl/gaiyou_r03.pdf：2023年11月1日取得。）
- 「社会保障給付費の推移」「社会保障給付の部門別の国際的な比較（対GDP比）」（<https://www.mhlw.go.jp/content/000973207.pdf>：2023年11月1日取得。）
- 「2021年 国民生活基礎調査の概況」（<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa21/dl/02.pdf>：2023年11月1日取得。）
- 「令和4年簡易生命表の概況」（<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life22/dl/life22-02.pdf>：2023年11月1日取得。）（<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life22/dl/life22-04.pdf>：同上。）
- 東京労働局（2023）「Press Release 東京都最低賃金を1,113円に上げます」（<https://jsite.mhlw.go.jp/tokyo-roudoukyoku/content/contents/001559900.pdf>：2023年12月25日取得。）
- 国立研究開発法人国立環境研究所「侵入生物データベース」「ハキダメギク」（<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/80540.html>：2023年10月23日取得。）
- 佐伯梅友校注（1988）『古今和歌集』（岩波文庫）岩波書店。
- 佐々木信綱編（1973）『新訂 新訓 万葉集 下巻』（岩波文庫）岩波書店。
- Sandel, Michael J. (2012) *What Money Can't Buy: The Moral Limits of Market*, Farrar, Straus and Giroux：鬼澤忍訳（2014）『それをお金で買いますか 市場主義の限界』（ハヤカワ文庫）早川書房。
- 島内裕子校訂・訳（2023）『枕草子 上』（ちくま学芸文庫）筑摩書房。
- 清水茂（1978）『唐宋八家文（一）』（中国古典選35）朝日新聞社。
- Speake, Jennifer (ed.) (2004) *Oxford Dictionary of Proverbs*, 4th ed., Oxford University Press.
- スミス，アダム（水田洋訳）（1981）『道徳感情論』筑摩書房：〈原著〉Smith, Adam (1759) *The Theory of Moral Sentiments.*
- 新村出編（2018）『広辞苑 第七版』岩波書店。
- ダーウィン，チャールズ（八杉龍一訳）（1990）『種の起源（上）（下）』（岩波文庫）岩波書店：〈原著〉

Darwin, Charles (1859) *On the Origin of Species by Means of Natural Selection or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life.*

竹林滋 (2002) 『新英和大辞典 第6版』研究社。

谷崎潤一郎 (1975 (1916)) 「神童」『谷崎潤一郎文庫 第4巻 羹・神童・鬼の面・異端者の悲しみ』六興出版。

田丸徳衛監修・山我哲雄編訳 (1991) 『カラー版 世界宗教事典』教文館：〈原著〉Kennedy, Richard (1984), *The dictionary of Reliefs*, BLA Publishing.

田村隆一 (2008) 『インド酔夢行』(講談社文芸文庫) 講談社。

『東京新聞』(夕刊) 「元競走馬に輝ける場を 目立つ殺処分「寿命全うさせて」」2024年1月30日。

東京都環境局「ごみが埋立処分されるまでの流れ」ページ番号777-286-134 (https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/resource/landfill/final_disposal/index.html : 2023年11月5日取得。)

時田昌瑞著 (2000) 『岩波ことわざ辞典』岩波書店。

日本大学アメリカンフットボール部薬物事件対応に係る第三者委員会 (編引万里子 (委員長)・中村直人・小林明彦) (2023) 「報告書」(2023年10月30日) (<https://www.nihon-u.ac.jp/uploads/files/20231031115138.pdf> : 2023年10月31日取得。)

日本大学 (2023) 『教職員便覧 令和5年度版』日本大学広報部。

New York Post, Sep. 25, 2013 (<https://nypost.com/2013/09/25/cruz-ends-21-hour-filibuster/> : 2023年11月1日取得。)

農林水産省「日本の食料自給率 令和4年度の食料自給」(https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/012.html : 2023年11月25日取得。)

林真理子 (2022) 「理事長就任挨拶」『日本大学学報』第1078号。

— (2023) 『マリコ, 東奔西走』文藝春秋。

福沢諭吉訳 (1869) 「世界国尽」富田正文編者代表 (1981) 『福沢諭吉選集 第2巻』岩波書店。

ヘーゲル (長谷川宏訳) 『歴史哲学講義 (上)』(岩波文庫) 岩波書店：〈底本〉Hegel, G. W. F. (1840) *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte.*

ヴェーバー, マックス (脇圭平訳) (2022) 『職業としての政治』(岩波文庫) 岩波書店：〈原著〉Weber, Max (1919) *Politik als Beruf.*

翻訳委員会訳 (2015) 『文語訳 新約聖書 詩篇付』(岩波文庫) 岩波書店。

Marshall, Alfred (1885) *The Present Position of Economics, An Inaugural Lecture Given in the Senate House at Cambridge 24 February*, Macmillan and Co. : 永沢越郎訳 (1991) 「経済学の現状」『アルフレッド・マーシャル 経済論文集』岩波ブックサービスセンター。

— (1907) *The Social Possibilities of Economic Chivalry*, *The Economic Journal*, Volume 17, Issue 65, 1907 : 永沢越郎訳 (1991) 「経済騎士道の社会的可能性」前掲『アルフレッド・マーシャル 経済論文集』。

マキアヴェルリ (大岩誠訳) (1967) 『君主論』(角川文庫) 角川書店：〈底本〉Scherillo, M. (ed.) (1924) *Niccolò Machiavelli, Il Principe e altri scritti minori*, Milano.

牧野富太郎 (2022 (1943)) 『植物記』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房。

— (2023 (1998)) 『植物一日一題』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房。

差別偏見と人文社会科学の視点

- 松村哲夫 (2023) 「ひろば 「雑草」という呼び名は非礼」『上毛新聞』2023年8月8日。
- 真屋尚生 (2023) 「禅画と人文社会科学の視点—価値多元化社会における仙厓の後世への最大遺物「〇△□」考—」『商学集志』第92巻第4号。
- マルクス, カール (城塚登訳) (2021) 『ユダヤ人問題によせて—ヘーゲル法哲学批判序説』(岩波文庫)
岩波書店: 〈原著〉Marx, Karl (1844) *Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie, Einleitung.*
- ミル (大内兵衛・大内節子訳) (1984) 『女性の解放』(岩波文庫) 岩波書店: 〈原著〉Mill, John Stuart (1869)
The Subjection of Women.
- 森鷗外 (2023 (1912)) 「かのように」『ちくま日本文学 017 森鷗外』筑摩書房。
- 吉川幸次郎 (1978) 『論語 (上) (中) (下)』(中国古典選3・4・5) 朝日新聞社。
- ラスキン (石田憲次・照山正順訳) (2015) 『胡麻と百合』(岩波文庫) 岩波書店: 〈原著〉Ruskin, John
(1871) *Sesame and Lilies.*

〔付記〕

本稿冒頭に記したように、本稿は、『上毛新聞』(令和5年8月8日)「ひろば」に掲載された松村哲夫稿「『雑草』という呼び名は非礼」に目を通したことがきっかけになり、執筆を思い立った。主として電子メールによる交流を通じて、折にふれさまざまな思考の材料を提供してくれる松村君に、まず感謝の意を表したい。

筆者にとってはまったく未知の世界の主役ともいべき競走馬・サラブレッドについては、競走馬の日本から海外への、逆に海外から日本への遠征に関わる諸事万端を、馬主や調教師ほかの要望に合わせて調整する、(元)騎手でレイス・ホース・コーディネイターの安藤裕さんに、貴重な時間を割いていただき、多くの非常に興味深い話を聞かせていただいた。感謝の気持ちを込めて特記しておきたい。ただ、残念なことに、それを十分に本小論で生かすことができず、当該箇所の記述に難点があるかもしれない。それらは、もっぱら筆者の競走馬に関する知識の貧困と理解力の不足によるものである。

本小論の刊行に向けての最終段階において、お名前を知る由もない2名の「査読員」には、「雑多」な内容からなる本稿を精読していただき、細部にわたる貴重な修正意見をいただいた。匿名の native speaker には、Abstract を校閲していただいた。これら3名の方がたからいただいたご意見は、筆者の責任において、そのほとんどすべてを本稿に反映させるように努めたが、日本大学理事長・林真理子氏に対する批判を展開している「2. 日本雑草綺譚 (3) 「ハキダメギク」突然変異種」ほかの論述を削除してはどうか、との提案には、筆者・真屋の研究者としての良心と(元)大学人としての信念から従わなかった。当該箇所の記述に問題ありとすれば、それはすべて筆者の責任である。査読校閲をしていただいた3名の方がたに感謝します。

さらに、本小論の執筆から刊行にいたる過程で、日本大学商学部図書館レファレンス係、日本大学商学部研究事務課、川崎市総合教育センター、練馬区立牧野記念庭園の皆様、直接間接にご協力ご助力いただきました。ありがとうございます。

(Abstract)

The world around us is full of ‘miscellaneous’ things, for example, houses, furniture, electrical appliances, automobiles, computers, clothing, foodstuffs, medicines and other things. We produce and use them every day. Most of them more or less contain ‘miscellaneous chemicals and compounds’ that are difficult to dispose of. That is no exaggeration. However, if you must remember all the names and properties of chemical substances and compounds around you, you will be so busy learning that you cannot live a normal life. Modern Japanese people live surrounded by a huge variety of ‘miscellaneous’ things that tend to be usually neglected in daily life. It is not at all uncommon for people to treat these things as ‘miscellaneous’ and to find that their convenience in daily life is greatly increased.

Nowadays, as the global trends place emphasis on social inclusion and many countries aim to build an inclusive society, we need to understand the discrimination and prejudice that exist all around us. I think we need to sharpen our awareness of the issue of ‘miscellaneous’ that often overlaps with the discrimination and prejudice in Japanese socio-economic context.

This paper was intellectually stimulated by Tetsuo Matsumura’s essay on Emperor Showa’s and Tomitaro Makino’s view of ‘weeds’ or ‘zasso’ in Japanese and raises questions about the past and present of the socio-economic significance of ‘miscellaneous’ in Japanese society from the viewpoint of humanities and social sciences.